世界名作劇場

小公女セーラ
（プリンセス）

『屋根裏のパーティ』（仮）

第22話

制作　日本アニメーション
　　　フ　ジ　テ　レ　ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第22話「屋根裏のパーテイ」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ピーター
ベッキー
ロッテイ
アーメンガード
ラビニア
ガートルード
ジエシー

モリー

ジェームス

メール(子ネズミ)

エミリー(人形)

シーザー(猫)

1

破れたセーラの靴

手にとられたその片方の靴——が、靴直しの鉄床にさし込まれ、釘が打たれる。

2

市場近くの街角（夕景）

靴直しの道具を拝借して、セーラの靴底に釘を打っているのは、ピーター。

前で、野菜籠を置いたセーラが、片足立ちでピーターの仕事振りに感心している。

——打つピーター。

——脇で、壁にもたれて昼寝している靴直しの老人。

ピーター、最后の釘を器用に打ち終る。

ピーター「さあ、直りましたよ、お嬢さん」

傍のブラシで手早く靴を磨き、

ピーター「へい、お待ち遠……」

セーラの脚の前に置く――

セーラ「有難う、ピーター」

セーラ、その靴をはいてみる。

ピーター「どうです、はき心地は？」

セーラ「わあ、すっかり新しくなったみたい」

ピーター「よかった……あんな破れ靴はいて……」

3

フラッシュ

雨の中を、破れた靴先をしばって歩くセーラ――

ピーターの声「雨の中お使いするなんて、お気の毒で見ちゃいられなかったんです」

4

市場近くの街角（夕景）

セーラ「お蔭で助かったわ……だけど、驚いたわ。ピーターって、靴直しまで出来るのね」
ピーター「なあに、この位出来ないと、直し賃が大変ですからね……おっと、忘れてた」
靴直しの老人に、
ピーター「おじさん、商売道具有難う」
老人、高いびき ——
クスッとセーラと顔を見合せたピーター、ポケットからリンゴを出し、
ピーター「じゃ、借り賃はここへ置くよ」
そのリンゴを老人の作業前掛の膝に置く。
ピーター「さ、遅くなっちまったぞ。送りますよ」
セーラの野菜籠を取り上げる ——

セーラ「有難う……急がなくては……」

5

ミンチン女学院・一階の廊下（夕景）

女生徒たちの歓声に――のっそり来たシーザーが怪訝に見る。

×　×　×

院長室の前で、女生徒たちに手紙や小包みを配っているアメリア――

アメリア「さ、アーメンガードさんには、二つも小包みが届いていますよ」

アーメンガード「え、二つも？」

女生徒たち、騒ぐ――

アメリア「ひとつは、お父様からです」

重そうな四角い小包み（本十冊分）を渡す。

アーメンガード「（泣顔）ま、また本だわ」

どっと笑うラビニアたち ——

アメリア「それから、もうひとつは、ロンドンにいらっしゃる小母様からよ」

アーメンガード「わあ、イライザ小母さんから？」

アメリア「はい、これで全部終りですよ」

アーメンガード、ボール箱の小包みを受取る。

アメリア、一同を見渡す。

アメリア「ええと、ここで皆さんにお報せしておく事があります……実は私、今夜は親戚の小母の家へ泊りに行くので、この学院にはいない事になります」

どっと騒ぐ女生徒たち ——

アメリア「（押えて）ですから、今夜はいつものように、皆さんのお部屋を廻ってあげられません…………夜遅くまでお喋りしていたり、毛布を蹴飛したりしないで、静かにお寝

みするのですよ、判りましたね」

一同「はあい……」

――そっと顔を見合せるアーメンガードとロッテイ。

6 同・表（夜）

点燈夫が、ガス燈を点けて行く――

×　×　×

来るセーラとピーター。

ピーター「じゃ、お嬢さん、また……」

セーラ「有難う、ピーター」

野菜籠を受取ると、地下への階段へ急ぐ。

心配そうに見送るピーター――

7 同・台所（夜）

ジロリとセーラを見おろすモリーと、ジェームス――

モリー「一体、どこで道草食ってたんだい。買出しに出てから、もう何時間も経ってるじゃないか」

セーラ「すみません……靴がこわれていて、歩けなくなってしまったんです……それで、やっと直して貰って……」

モリー「フン、下手な云い訳や、嘘っぱちは沢山だよ。そんなにこへ戻りたくなきゃひと晩中外に居りゃよかったじゃないか」

ジェームス「全くだ。今頃帰って来たって、夕食の間に合いやしねえんだ。お蔭でこっちまで院長先生にどやされちまったぞ」

セーラ「申訳けありません……」

一方に、ハラハラと窺っているベッキー。

ベッキー「あのォ……」

モリー「なんだい」

ベッキー「セーラさんに、夕食を用意してあげてもいいでしょうか」
モリー「なんだって？」
ベッキー「セーラさんは、お昼もまだなんでございます」
モリー「知らないね、そんな事……セーラ、食べるものを食べさせて貰いたきゃ、ぐずぐずしてないで、早く仕事をすませる事だよ」

モリーとジエームス、空鍋を片附けはじめる。

ベッキー、そっと近づくとセーラに囁く。

ベッキー「お嬢様……戸棚に古いパンが取ってあります。紅茶をひたせば食べられますから」
セーラ「有難う、ベッキー」

突然、モリーが振返る——

モリー「ベッキー！……セーラは、夕食は抜きなんだからね、余計な手助けしたら承知しないよ。ジエームス、戸棚の古パンを片附けておしまい」

ジェームス「よしきた。さ、二人とも仕事だ仕事だ！」
どんと空鍋を卓に置く――
ガックリと顔を見合せるベッキーと、セーラ――。

8 同・二階の廊下（夜）

階段を上って来たミンチンが振鈴を鳴らす――閉っているドア、ドア、ドアを確めると三階へ上って行く。

9 同・アーメンガードの部屋（夜）

ジェシー「おやすみ！」
ガートルード「おやすみ！」
パッと灯りが消え、二人、ベッドにもぐり込む――

×　　×　　×

暗い中で——空いたラビニアのベッドの向う側から、
そっとアーメンガードが半身起す。

10 同・二階の廊下

ロッテイの部屋のドアが細く開き、そっとロッテイが廊下を窺う。

×　　×　　×

離れたアーメンガードの部屋のドアも、そっと細く開き、赤いショールのアーメンガードが顔をのぞかせる
——

二人、しめし合せて頷き合う——

11 同・地下の洗い場（夜）

山積みの鍋や皿を洗っているセーラとベッキー——ベッキー、窺って囁く。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ「え……」

ベッキー「ここは私がやりますから、お嬢様は、先にお部屋に戻って下さいまし」

セーラ「いけないわ、私だけ先になんて」

ベッキー「いいえ、私は、夕食は頂いてるんですから……」

セーラ「でも……」

ベッキー「お嬢様……私も憶えがあるのでよく存じています。食事を抜かれた晩は、体中の力が抜けて、とても働けるものじゃございません、ここから屋根裏部屋まで階段を上る丈だって、どんなに大変だか知れませんでした。ですから、今夜は……」

セーラ「あ、有難う、ベッキー」

12

同・一階への階段（夜）

重い足を曳いて上るセーラ——ベッキーの先刻の声が反響する。

ベッキーの声「ここから、屋根裏部屋まで……」

13

同・二階への階段（夜）

昇るセーラ——ベッキーの声が反響する。

ベッキーの声「階段を上る丈だって……」

14

同・三階への階段（夜）

シーザーの寝ている階段を上って来るセーラ——ベッキーの声が反響する。

ベッキーの声「どんなに大変だか知れませんでした……」

15 同・屋根裏への階段（夜）

その声を嚙みしめるように上って来るセーラ――

16 同・屋根裏部屋の前（夜）

上って来たセーラ、はっと見る。
――ドア下から洩れている灯り。
セーラ「まあ、アーメンガードが来てくれているんだわ」

17 同・屋根裏部屋（夜）

ベッドの上に蹲っていた赤いショールのアーメンガー

ドとロッテイが、ドアの音に振返る。

アーメンガード「セーラ……！」

ロッテイ「セーラ・ママ……」

入って来るセーラ――眼が輝く。

セーラ「アーメンガード、ロッテイ……よく来られたのね」

ロッテイ「うん、今夜はアメリア先生いないの」

セーラ「え？」

ロッテイ「親戚へ泊りに行くんですって。だから今夜は寝室を見廻りに来ないわ」

ロッテイ「朝までここにいたって平気よ」

セーラ「まあ、それで待っていてくれたのね」

アーメンガード「ええ……でも怖かったわ……ネズミ達が出て来て、嗅ぎ廻ったり、ベッドの上に飛び上りそうになったり……」

セーラ「まあ、メルたちが……」

その時、壁穴から出て来るメルの一家。

ロッテイ「ほらね。私、ビスケットあげたんだけど、もうなくなっちゃったの」

セーラ「そお……ごめんなさい、メル……私も、今夜はなにも食べる物を持って来てあげられなかったのよ」

メルの一家、鼻をうごめかしたが、仕方なく壁穴に帰って行く。

セーラ、ふとテーブルの上に置かれた十冊程の分厚い金文字の本に気づく。

セーラ「まあ……どうしたの、この本」

アーメンガード、げんなりと肩をすくめてみせる。

アーメンガード「また、お父さんが送ってよこしたの……あなたなら読めるかと思って」

セーラ、その本を取る——

セーラ「まあ、カーライルのフランス革命史ね」

アーメンガード「え、知ってるの？　そんな本のこと」
セーラ「ええ、いつか、お父様に買って頂こうと思っていた本よ」
　　アーメンガード、悲し気に肩をすくめる。
アーメンガード「うちのお父さんたら、私に夏休みまでに、その本を読んで、憶えておくようにですって」
　　積まれた本をうらめし気に見る。
セーラ「まあ……」
アーメンガード「（涙ぐむ）とても無理よ」
セーラ「いいわ、アーメンガード……私が先に読んで、少しづつあなたにお話してあげるわ。それならきっと憶えられるわ」
アーメンガード「え、ほんと？（喜色が浮ぶ）」

18 同・台所（夜）

　　暗い台所で——そっとオーブンから肉パイの器を取り

出すベッキー。

19 同・三階の廊下（夜）

肉パイの皿を手に、足音を殺して上って来るベッキー

——

突然、ドアが開き、ミンチンが現われる。

ベッキー「（仰天）あ、院長先生！」

ミンチン「なんです、そのいれものは？」

ベッキー「は、はい……こ、これは、アメリア先生がいつも夜食に召上る肉パイで、今夜もお運びするようにと……」

ミンチン「嘘を仰言やい！　……アメリアは、先刻親戚へ泊りに出掛けています」

ベッキー「えっ……」

ミンチン「ベッキー！　一体、誰に頼まれてそんなものを勝手に作

ったのです。さ、云うんです。云わないと……」

大きく平手を振上げる――

――C・M――

20

同・屋根裏部屋（夜）

はっと本から顔をあげるセーラ、耳をすます――

セーラ「ベッキーだわ……ベッキーが、院長先生に叱られているんだわ」

アーメンガード「ええッ！」

驚くアーメンガードとロッテイ――

21

同・三階の廊下（夜）

ベッキーから取上げた肉パイの皿を手に、

ミンチン「さ、云いなさい、一体この肉パイを誰が食べる筈だったのです」

ベッキー「（泣く）お、お許し下さいまし……私、あまりお腹がすいたので、自分の部屋で頂こうと……」

ミンチン「なんですって……？」
ベッキー「ほんとです……私、ひとりで食べるつもりだったんです……」
ミンチン「呆れた！　……お前のような意地汚なしは、許す訳に行きません。この学院から出て行きなさい！」
ベッキー「お、お許し下さい、院長先生……」
そっとドアを細く開けて見ているラビニア——

22 同・屋根裏部屋（夜）

ドアの傍で聞くセーラ、アーメンガード、ロッテイ——
——階下からベッキーの泣声が聞えて来る。
ベッキーの声「お願いでございます、院長先生、私を追い出さないで下さいまし……」
ミンチンの声「やかましい！　さあ、さっさと部屋へ行くんです！」

突然、バタンとドアの音——続いて、ガタガタと階段を上って来る音が聞える。

アーメンガード「大変、院長先生が来るわ」

ロッテイ「どうしよう！」

セーラ「灯を消して！」

セーラ、急いで燭台の灯を消す。

アーメンガードとロッテイ、一方に隠れる——同時に、ドアが開き、飛び込んで来るベッキー、急いでドアを閉める。

セーラ「ベッキー！」

ベッキー「あ、お嬢様……！」

セーラ、急いでベッキーの傍に行く。

ベッキー「お許し下さい、私、お嬢様に食べて頂こうと、肉パイをお作りしたんですけど、院長先生に見つかってしまって……」

セーラ「なんですって？」

ベッキー「でも、大丈夫です。私、お嬢様にお作りしたなんて、ひとことも云わないで頑張りました。お蔭でひどく叩かれましたけど、心配はいりませんです」

セーラ「ベッキー……」

アーメンガードとロッテイが、茫然と出て来る——

アーメンガード「セ、セーラ……」

セーラ「え……」

アーメンガード「あの、もしかしたら、あなたたち、ひどくおなかがすいていたんじゃなくて？」

顔を見合せるセーラとベッキー。

アーメンガード「ごめんなさい……私、ボンヤリだから気がつかなかったの……あなた、私が大好きな小母さんの事、憶えている？」

セーラ「勿論よ……イライザ小母さんでしょ？」

アーメンガード「ええ……実は、あの小母さんが、今日お菓子の包みを送ってくれたの」
セーラ「まあ……」
アーメンガード「それを私、また忘れて……今取って来るわ。みんなで食べましょうよ」
ロッテイ「わあい……」
セーラ「有難う、アーメンガード……でも、今降りて行ったら院長先生に…」
ベッキー「お嬢様……大丈夫だと思います。院長先生は、お部屋へ戻りましたから、今頃きっと……」

23 同・ミンチンの居室（夜）

ベッドに入ったミンチンが、ベッキーの作った肉パイを貪り喰っている——

24

同・屋根裏部屋（夜）

セーラ「そお……じゃ、アーメンガード、気をつけてね」

アーメンガード、頷いてそっと出て行く。

ほっと顔を見合せるセーラたち三人。

セーラ「さ、これからこの四人で、パーティを開くのよ」

ロッテイ「わあイ！」

セーラ「シイッ……さあ、テーブルの仕度をしなくては……」

ロッテイが、ベッドから赤いショールを拾う。

ロッテイ「あ、アーメンガードのショールよ」

セーラ「丁度いいわ、テーブルクロスに借りましょう」

ベッキー「私、部屋へ行って飾れそうなものを探して来ますです」

セーラ「ええ、お願いね、ベッキー」

25

同・三階の廊下（夜）

ミンチンの部屋の前をそっと通り抜けるアーメンガード――シーザーが大あくび。

26 同・ベッキーの部屋（夜）

例のつづらを運び出すベッキー。

27 同・二階の廊下（夜）

そっとドアに近づくアーメンガード、部屋に入り込む
――

28 同・アーメンガードの部屋（夜）

入って来たアーメンガード、寝ているジェシーたちを

確めると、自分のベッドの傍に行き、ボール箱を抱え上げる。

再びドアへ戻り、出て行く——一瞬、カチッとノブの音。

同時に、待ち構えていたようにはね起きるジェシーとガートルード。

ジェシー「ね？　云った通りでしょ」

ガートルード「ほんと……ラビニアに知らせるのよ」

二人、素早くベッドを脱け出す。

29 同・三階の廊下（夜）

箱を抱えたアーメンガード、そっと屋根裏階段へ——

そのあとから尾けて来たジェシーとガートルード、急いで特別寄宿生室へ行くとノックする——ドアが開き、

ラビニアが顔を出す。

30 同・屋根裏部屋（夜）

テーブルに赤いショールが飾られ、セーラとベッキーが、椅子や木箱を囲りに並べている。

手伝っているロッテイ。

セーラ「ベッキー、悪いけどその帽子を借して下さらない」

ベッキー「帽子、でございますか」

セーラ「そうよ……」

ベッキー、帽子をとると渡す。

ベッキー「あの、これはなんのお役に立つんでしょうか」

セーラ「これはね、パーティ用の真ッ白な盛り花のつもりなの……ほらね」

セーラ、テーブルの中央に、ベッキーの帽子で巧みに

花型を作る。

ロッテイ「わあ、ほんとのお花みたい」

ベッキー「なるほど、立派なつもりでございますわ」

そこへ箱を抱えたアーメンガードが入って来る。

セーラ「あ、アーメンガード……大丈夫だったの？」

アーメンガード「ええ、うまくやったわ……みんなグゥグゥ寝てたもの」

セーラ「よかった……さ、パーティのお料理の飾りつけよ」

ロッテイ「わあい……」

31 同・ラビニアの特別室（夜）

驚くジエシーとガートルード――

ジエシー「え、じゃ、ずっとあなた、気がついていたの？」

ラビニア「決ってるでしょ。ベッキーが院長先生に叱られてから、

眼をさましてたのよ」

ガートルード「で、どうするの、セーラたちのこと」

ラビニア「フン、二度と屋根裏部屋で勝手なことが出来ないよう、注意してあげるだけよ」

32 同・屋根裏部屋（夜）

アーメンガードが持ち込んだ箱から、手製のクッキーやボンボンなどを、それぞれ皿の形に並べた紙片に取り分けるセーラ――囲んでベッキー、アーメンガード、ロッテイたち。

セーラ「よくって？　ここは屋根裏部屋なんかじゃなくって、マリーアントワネットがいたヴェルサイユ宮殿の大広間なのよ」

アーメンガード「え、ここが？（見廻す）」

セーラ「シイッ、そのつもりになるのよ……私たちはその宮殿の侍

女たちなの…間もなく国王ルイ十六世に招かれた貴族達が、
パーテイに集って来るのよ」

ロッテイ「ほんと?」

セーラ「つ、も、り、よ」

ベッキー「つもり、でございますね」

ベッキー、眼を閉じて、力を入れる。

ロッテイ「ベッキー、なにをしているの」

ベッキー「はい、私、今、宮殿の侍女になろうとしてたんでございます……でも、お嬢様、つもりになるって、随分力が入るもんでございますね」

セーラ「(微笑)大丈夫よ、そんなに力まなくても……さ、お料理は揃ったわね」

アーメンガード「ええ、イライザ叔母さんが作ったクッキーと、ケーキと……」

セーラ「シイッ……クッキーとケーキじゃないわ、ここに並んでい

るのは、特別に焼かせた王宮のステーキと、肉パイよ」
ロッテイ「えぇッ？」
セーラ「それに、お料理をのせてあるお皿は、全て金で出来ている
　の……ほらね」

33 イメージ・モンタージュ

一瞬——紙皿が黄金に輝く。
セーラ「ほら、床にはフカフカのジュウタンが敷きつめられている
　わ」
——床一面に現われるジュウタン。
セーラ、煖炉に行き紙クズに点火する。
セーラ「天井には、シャンデリア！」
——炉の反映がシャンデリアに変る。
セーラ「そして、私達は、美しい侍女なのよ」

――一斉に侍女に変るセーラたち。

セーラ「さ、国王とマリーアントワネットが大広間にお見えになるわ!」

音楽高鳴り――大広間の中央扉が開かれる。

その時――

ミンチンの声「なにをしているのです!」

34

同・屋根裏部屋(夜)

開いたドアに、仁王立ちになっているミンチンと――

愕然と立尽しているセーラ、ベッキー、アーメンガード、ロッテイ――

ミンチン「こんな大それた事をしていたなんて、ラビニアさんが報せなかったら、朝まで見逃す所でした……さ、みんな、早く片附けるんです」

仕方なく片附けにかかるアーメンガード、泣き顔のロッテイ、しおれたベッキー、無言のセーラ――

ミンチン「セーラ……」

セーラ、手を停めてミンチンを見る。

ミンチン「この計画が、アーメンガードから出たものでない事は判っています」

アーメンガード「あの、私、セーラがおなかがすいていると思って」

ミンチン「あなたは黙って……セーラ、お前には、明日、はっきりとしおきをする事にします……アーメンガード、ロッテイ、部屋へ戻るんです」

アーメンガードとロッテイ、仕方なくケーキやクッキーを入れた箱を抱えて出て行く。

ミンチン「ベッキー、お前もです！」

ベッキーも泣き顔で出て行く――

ミンチン「いいですね、セーラ……お前は、明日の朝も、昼も、夜

も……食事抜きです！」

云い捨てざまミンチン、出て行く――

凝然と立尽して見送っているセーラ――

ふと壁穴から、子ネズミのメルが出て来る――

両足で立ち、鼻をヒクヒクさせる。

セーラ、そっと坐ると、メルに話かける。

セーラ「ごめんなさい、メル……あなたの家族も御招待するつもりだったのだけど、パーティは、この通り消えてしまったのよ」

じっとメルをみつめるセーラ――

セーラのN「つもりのパーティは、夢と消えました……でも、その僅かな時間だけでも、私は辛い事も、ひどくおなかがすいている事も、やっと忘れていられたのです……」

おわり